

2016 都民芸術フェスティバル 参加公演

第四十六回

邦楽演奏会

「喜・怒・哀・楽」

第一部

義大夫節
常磐津節
清元節
新内節
長唄節
宮園節
三曲

第二部

長唄
一中節
三曲
常磐津節
新内節
義大夫節
清元節

【主催】邦楽連合会

(一社) 義大夫協会

清元協会

(二財) 古曲会

新内協会

常磐津協会

(一社) 長唄協会

(公社) 日本三曲協会

【助成】東京都・(公財) 東京都歴史文化財団

邦楽振興基金

【後援】(公財) 日本伝統文化振興財団

平成28年3月5日[土] 国立劇場小劇場

完全入れ替え制・全席自由

第一部◎開場11:00 開演12:00 第二部◎開場15:30 開演16:00

ご挨拶

本日は、二〇一六年都民芸術フェスティバル「邦楽演奏会」にお運びくださりましてありがとうございます。

昭和四十六年から続いておりますこの演奏会は、本年をもちまして四十六回を数えます。この催しは、多種の邦楽を一同に集めまして、義太夫協会、清元協会、古曲会、新内協会、常磐津協会、長唄協会、日本三曲協会という七つの団体（邦楽連合会）が力を合わせて、日本の伝統芸能をお聴かせする、他に例を見ない大変に意義のある鑑賞会と自負致しております。

本年は副題を「喜・怒・哀・楽」とし、これらの人間がもつ様々な感情を唄い、表現した演目を選びまして皆様にお届けし、様々な雰囲気味わっていただくことと致しました。

曲と曲との間は、邦楽ではお馴染みの葛西聖司さん（元NHKエグゼクティブアナウンサー）の楽しいお話で綴っていただくなど、皆さまに、より邦楽に親しんでいただけますように願っております。

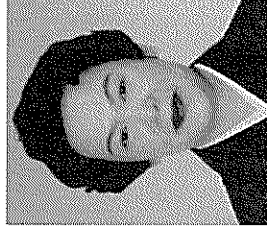
何かと不行き届きの点もあるかと存じますがお許しを頂きまして、どうかごゆっくりとご鑑賞下さいませようお願い申し上げます。

邦楽連合会代表 萩岡松韻

第46回 邦楽演奏会 第一部 「喜・怒・哀・楽」 12時開演

喜	三曲	<small>いちこつちようしゆくが</small> 壹越調祝賀
哀	宮蘭節	<small>やまざき</small> 山崎
楽	長唄	<small>にわかじし</small> 俄獅子
怒	新内節	<small>ひだかがわ</small> 日高川
哀	清元節	<small>きよひめしつとのだん</small> 清姫嫉妬の段
怒	常磐津節	<small>みちとせ</small> 三千歳
楽	義太夫節	<small>まさかど</small> 将門
		<small>かつらがわれんりのしがらみ</small> 桂川連理柵
		<small>おびやのだん</small> 帯屋の段（前）

- 高等 宮下 秀冽
 高等 植松 秀佐栄
 相澤 秀照恵
 宮下 秀州
 四方田 秀沙
 高等 吉岡 秀紗
 足立 秀紫
 守富 秀美誠
 坂本 秀穂栄
 低箏 堀江 秀美喜
 川島 秀比文
 木下 秀操
 山本 秀韜
 低箏 元木 秀唱
 谷川 秀翬
 糸井 秀良梓
 伊藤 秀凜晶



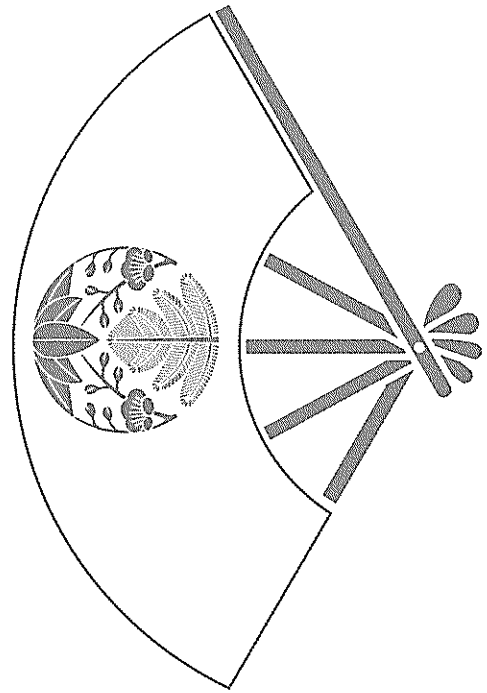
二世宮下 秀冽 (みやした しゅうれつ)

幼少より、父初世宮下秀冽に箏を学ぶ。昭和四十三年東京藝術大学を卒業。在学中に安宅賞を受賞、昭和四十七年芸術選奨文部大臣新人賞を受賞する。平成五年二世宮下秀冽襲名。平成十四年赤坂迎賓館にて、アメリカ合衆国アッシュェ大統領夫人歓迎会にて演奏を披露。現在秀冽社紫線会会長。十文字学園、星美学園、神田女学園箏曲部講師。日本三曲協会理事、山田流箏曲協会理事。

解説

壹越調祝賀

「壹越調祝賀」は、子供が誕生したのを祝いし、箏の独奏曲として作曲されました。しかし作曲された昭和十六年は、日本国中が戦争へ向って一色の時代でしたので対外的な発表は控えられ、内々で演奏された後は長いこと演奏されることはありませんでした。その後昭和三十年に演奏会で発表するにあたり、新たに低箏を加え、箏の二重奏として発表されました。今日では低箏部分は尺八で演奏されることもあります。曲名の「壹越調」は雅楽の旋法に由来しており、D音を主音にした明るい曲調です。曲は三つの章からなり、第一楽章は曲名の由来通り雅楽風な曲調から始まり、やがて舞曲風に発展して行きます。第二楽章は抒情的な静かな歌謡風の旋律で、やわらかな余韻が響きます。第三楽章は一転して主題が華やかに様々に変形発展し、クライマックスの内に全曲が終わります。



浄瑠璃

宮園千碌

宮園千よし恵

宮園千敏恵

三味線

宮園千佳寿弥

宮園千佳寿奈

宮園千佳寿香



宮園千碌 (みやその せんろく)

宮園節浄瑠璃方。人間国宝。昭和四十年宮園節初代宮園千碌に入門。師事。昭和六十年宮園千碌業で名取所得。平成十一年重要無形文化財総合認定指定保持認定。平成十二年二代目宮園千碌襲名。平成十九年人間国宝に認定される。平成二十七年旭日小綬章を受賞。



宮園千佳寿弥 (みやその せんかずや)

宮園節三味線方。重要無形文化財宮園節保持者(総合指定)に認定。古曲会評議員。昭和四十八年宮園節四世、宮園千寿に入門。昭和五十一年宮園千佳寿弥で名取所得。平成十五年浄瑠璃方から三味線方に転向。平成二十二年重要無形文化財宮園節保持者(総合指定)に認定。平成二十三年清栄会奨励賞受賞。

解説

山崎 (道行菜種の乱咲)

山崎与次兵衛は、義兄弟の傷害事件の罪をかぶって、座数年に入れられます。父の浄閑は息子を許しません。それを知った大阪新町の遊女吾妻は、廓を抜け出して浄閑を尋ね与次兵衛の妻お菊とともに願って許され、二人は落ちてゆきます。その途中で与次兵衛が狂乱になるのは「梳久もの」と同じ趣向で、吾妻が介抱しながらの狂乱道行。原作は享保二年(一七二八)正月大坂竹本座初演の近松門左衛門作の『寿の門松』の下巻『与次兵衛吾妻道行』だが題名は「双蝶々曲輪日記」のそれを借りています。近松作を初代都一中が語り、(現行曲)、それを一中の弟子の宮古路豊後掾が語り、それをその弟子の宮園鸞鳳軒が語ったのが今日まで伝承されました。明和六年(一七六九)刊の『宮園花扇子』に収められているから、それ以前の成立。ほとんど同文なので、一中節との掛合演奏ができる貴重な曲です。

(竹内連敬 著)

詞章

へ今では人も秋篠や、外山の松よ言問はん。待つが辛いか別れが憂いか、待ちも別れもせぬやうに。親の許した女房を、義理と情けの双面、かけて思へど甲斐も無き、今は野末の離れ駒。昨日はあづまに恋を載て、今日は古郷へ焦れなき、我から狂ふ秋の葉の、乱れて袖に置きもせず、寝もせで露の偶々に、
へ恋する身にも待たると、待つ身になるな親と子の、便りを渡ぐ山崎の、妻もさこそは乱れ髪 言つた言葉が力ぞや。わしが馴染は三重の帯、長い夜すがら引締め、妬み憎みの心無く、預るものは半分と、主を忘れて居さんすか、過ぎし月見は井筒屋で、底意隈なき夜と共に、踊り明かした面白さ。わしや百まで忘りやせん。忘れぬものよ見飽かぬ君が、外ハ文字の遠中姿、目つきで殺す。へ初手に滞心領域(こまで、盥が女房請け出せ盥の底脱けて、影も宿らぬ後朝に、親を悲しみ妻を恋心一つを二品に、名乗りて過ぐる時鳥。しやが父に似て父に似ず子は色里に初音。冠は着れど大尽の、へ花車が轟く口舌の門。遣手が叩く禿が眠り、皆夢の世の境涯と、悟れば瓦智もなかりける。斯くは言へねど柳の糸の、蓬を乱す山嵐 烈しき親の謀めの言葉、妻が別れの一言、身に沁み沁みと恋しやと、互に手に手を取り交はし、涙曇るや露の玉、夕陽空に程なく、東南に向かう雲の脚。
梢木の葉もばらばら。小川の水音ざわざわ。月は行けども果てしなき、思ひは目前親の罰、当つて砕くる男の心。走れば走る留まれば留まる。廓の袖の乱れ心や。命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中と、暫しとてこそ賤が家の、軒を目あてに走り行く。

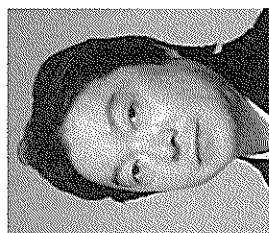
楽長唄 俄獅子

唄 杵屋直吉
松永忠次郎
杵屋喜太郎
三味線 杵屋五三郎
杵屋栄四郎
杵屋五助



杵屋直吉 (きねや なおきち)

一九五六年十五代杵屋喜三郎次男として生まれる。祖父は十四世杵屋六左衛門。父、祖父、十一世都一中各師に師事。一九六八年杵屋直吉を襲名。一九九五年松竹一〇〇年記念坂東玉三郎舞踊公演(日生劇場)「鏡獅子」で歌舞伎の立唄となる。



杵屋五三郎 (きねや ごさぶろう)

一九五五年三世杵屋五三郎次男として生まれる。一九七四年杵屋五三郎の名を許される。一九七五年東京藝術大学別科入学。一九七九年長唄東声会入会。杵屋五三助を経て、二〇一五年四代目杵屋五三郎を襲名。

解説

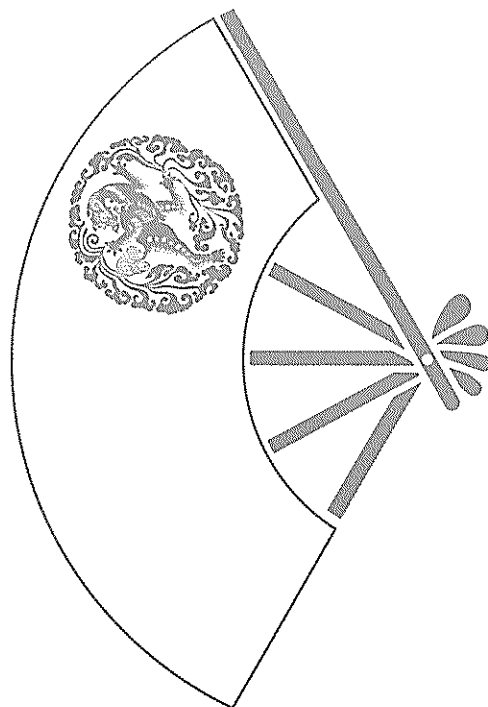
俄獅子

俄獅子は、四世杵屋六三郎によって作曲され、作詞者は未詳ですが、長唄「相生獅子」の歌詞が基とされています。男女の恋の様子を男獅子女獅子になぞらえて謡曲の歌詞も取り入れ、格式高い雅の世界として表現したのが「相生獅子」なら「俄獅子」はそれを遊女と客の情景に変えて表現し、吉原の初秋行事の「仁和賀(にわか)」の廓風俗の様も加え、江戸時代の俗の世界を变化にとんだ曲調に乗せて見事に表現しました。演奏会でも舞踊会でも大変人気のある名曲の一つです。

詞章

へ花と見つ五町驚かぬ人もなし なれも迷ふやさまごまに
へ四季折々の戯れは 紋日物日のかけ言葉
へ蝶や胡蝶の禿俄の浮れ獅子 見返れば花の屋台に見えつ隠れつ
色々の 姿やさしき仲の町
へ心づくしのナ その玉章も いつか渡さん袖のうち 心一つに思ひ草 よしや世の中
へ狂ひ乱るる女獅子男獅子の あなたへひらり こなたへひらり
ひらひらひら 忍ぶの峰かかさね夜具 枕の岩間瀧つ瀬の
酒に乱れて足もたまらず 他処の見る目も白浪や
へヤア秋の最中の 月は竹村 更けて逢ふのが間夫の客 ヨイヨイ
辻占みごと繰り返し なぜこのように忘れぬ 恥ずかしいほど愚痴になる
へというちゃア無理酒に なんでもこっちの待ち人 恋のナ恋の山屋が豆腐に釜
しまりのないので ぬらくらふらつく 噓ばかり ヨイヨイヨイヤナ
へ宵から待たせてまた行かうとは エエあんまりなど膝立て直し
へ締ろやれ たんだ打てや打て 打つは太鼓が取り持ち顔か
次ページへ続く

拗ねて裏向く水道尻に へお神楽蕎麦なら少し延びたと囃
 されて ちんちん鴨の床の内 たんたん狸の空寝入 抓った
 跡のゆかりの色に 打って変った仲直り あれはさ よい声
 かけや ヨイヤナ しどもなや
 (三下り) へ人目忍ぶは裏茶屋に 為になるのを振捨てて 深
 く沈みし恋の淵
 へ心がらなる身の憂さは いっそ辛いぢやないかいな へ逢
 はぬ昔が懐かしや
 へ獅子に添ひてや戯れ遊ぶ 浮きたつ色の群がりて 夕日花
 咲く廊景色
 目前と貴賤うつつなり へ暫く待たせ給へや 宵の約束今行
 くほどに 夜も更けし
 (狂ヒ合志) へ獅子団乱旋の舞樂もかくや 勇む末社の花に戯れ
 酒に伏し大金散らす君たちの 打てや大門全盛の 高金の奇
 特あらはれて 靡かぬ草木もなき時なれや 千秋万歳万々歳
 と 豊かに祝す獅子頭



怒

新内節

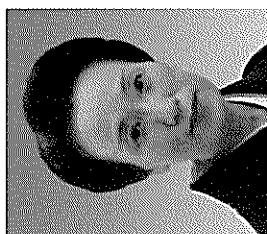
ひだかがわ
日高川

きよひめしつとのだん
清姫嫉妬の段

浄瑠璃 富士松 小照

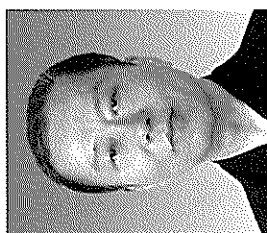
三味線 新内 仲三郎

上調子 鶴賀 伊勢 一郎



富士松 小照 (ふじまつ こてる)

東京生まれ。旭派家元。新内協会理事。幼小より富士松加賀照に師事。後に鶴賀朝太夫に師事。リサイタルは今までに七十回開催。文楽義太夫との掛け合いなど様々なジャンルとの共演に意欲的に取り組んでいる。新作も多数発表。



新内 仲三郎 (しんない なかさぶろう)

富士元派六代目家元・新内協会副理事長。昭和五十九年富士元派六代目家元・歌舞伎座にて襲名。平成五年芸術選奨文部大臣賞受賞。平成十三年新内節三味線の重要無形文化財保持者認定。平成十三年日・中・韓による「BOSSO」演劇祭に日本代表として出演。平成十五年紫綬褒章受賞。



安珍・清姫の道成寺伝説を題材とした邦楽や芝居はいろいろありますが、本曲もその一つで享保二年（一七四二）八月

大阪道頓堀豊竹座で初演された人形浄瑠璃「道成寺現在蛇鱗」全五段（並木宗輔・浅田一島合作）のうち四段目の景事「清姫日高川の段」（夢の場）を新肉節に移した（段物）で、初代鶴賀若狭掾の作曲と伝えられる古典的な大曲です。

清姫が川舟の舟長に、舟に乗せ向こう岸に渡してほしいと懇願しますが、舟長は、山伏から決して渡してはならぬと頼まれたので乗せることはできないと言って断ります。この舟長と清姫の川を隔てての問答が下の巻の聴きどころですが、清姫が川に飛び込み蛇体と化し、避けた口から火炎を吐きながら髪逆立てて泳ぎ渡る凄まじい光景に、舟長がびっくり仰天します。



つきにける 早や月代も 差し昇り 隈なく見ゆる 向こうの岸 小船舫つて舟長が 笠傾けて眠り居る

清姫「オオ 嬉しや この川越え行かば 道成寺まで一ト足ト 声をはかりに

清姫「ノウ ノウその舟渡してたべ 早う早うト 呼ばわれは 寝耳にびっくり 舟長が 目をすりこする仏頂面

舟長「あた 姦しい何じゃいの 早う早うと仰山そうに たった一人の舟賃取るとて 船をあつちこつち廻しては肩もたまらず 第一眠たいわいえ夜が明けたら渡してやるわえ

清姫「イヤノウ夜明けのことはさておいて 一寸の間も待たれぬ急用 道成寺まで早う行きたい 情けじや何卒 渡して下され

舟長「え 何じゃ 道成寺へ行くと云やれば宵に渡した山伏の後追つて来た女子じゃな それならば猶ならぬ かの山伏の頼みには 様子あつて某は道成寺へ逃げ行く者 十六・七な女子が来たならば必ず舟を渡してくれな 逢つてはたちまち命づくにも及ぶこと もしも渡さばそち共に難儀しよう くれくれも 頼む頼むとおつくり返しひっくり返しひっくり返し

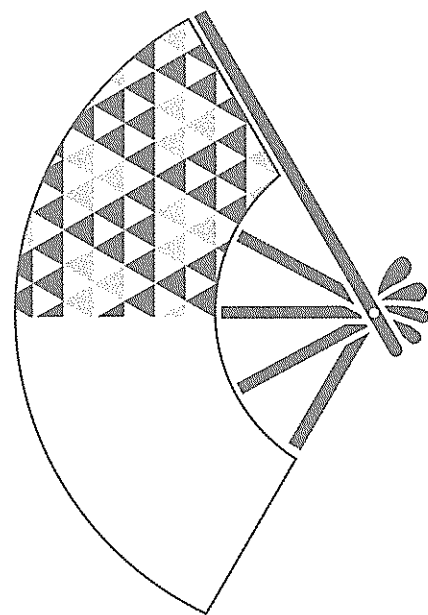
おつくり返し頼みやつたれば ここは一番遠引じゃ 渡す事はならぬ ならぬとつことなる

「コレノウ それは胴欲じゃ たとへ渡して下さつても こなたに科も難儀もかけまい 思ふ男を人に寝取られ わしは行かねば焦がれ死に つらい悲しい 身の上を 不憫と思ひ その舟に 乗せて下され 渡してたべ 慈悲じゃ情けじゃ 功德じゃわいの これじゃこれじゃと手 を合わせ 拝みつ詫びつ 身を悶え泣き叫ぶこそ道理なれ

今は詮方 泣く目をはらい

清姫「オオ 渡さぬとてここまで来て やみやみと帰ろうか恨み言わずに済まそうか この水底に沈まば沈め 死なば死ね 念力通さでおくべきか 百尋千尋も何のものかわ 渡つて見せんと身づくろい 川へ ザンブと 飛び込んで 逆巻く波をかきわけかきわけ 左手 に沈み 右手に浮き 抜き手を切つて サツサツサ サツと飛び散る水煙 雲を誘える蚊龍の 湖海を渡る如くにて跳ね立て 蹴立てて泳ぎしが 瞋恚の猛火 五体を焦がし 口より吐く息炎々たる 焔を吹きかけ 目を怒らし 髪逆さまに振り乱し 一念凝つたる勢いに舟長びっくり わな泣き声 ヤレ恐ろしや凄まじや 鬼になった 蛇になった それもう来るわ ヤレ上るは なめ殺

されてはなるまいと 舟を乗り捨て駆け上がり 堤ヶ原を横切りに 命からがら 逃げて行く清姫は一筋の瞋恚こうせい たゆまず去らず 難なく岸根に泳ぎ着き 照る月影を見渡せば 棟門高塀白々と 薨並べし 道成寺 供養の庭にぞ 着きにけり



浄瑠璃

清元 志寿雄太夫

清元 志寿乃太夫

清元 志寿坂太夫

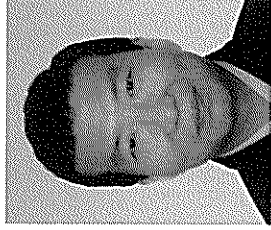
清元 志香太夫

三味線

清元 志寿朗

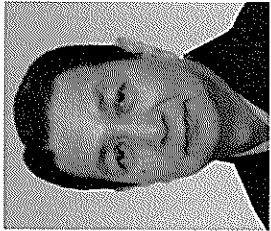
清元 勝三郎

清元 成太郎



清元 志寿雄太夫 (きよもと しずおだゆう)

昭和三十三年東京出身。祖父、志寿太夫。父、小志寿太夫と言う清元一家に生まれ、祖母の延香に手ほどきを受ける。国内のみならず、アメリカ、イタリア等の海外歌舞伎公演に出演し、平成十六年の浅草新春若手歌舞伎公演に於いてたて語りを務める。舞踊会、ラジオ等でも活躍中。



清元 志寿朗 (きよもと しずろう)

昭和十六年東京出身。父、志寿太夫。母、延香の他兄三人も清元社中という家で育つ。昭和五十五年京都南座歌舞伎公演に於いてたて三味線を務め、舞踊会、ラジオ、レコードにも出演。清元清朗会主宰。元東京芸術大学非常勤講師。清元協会・清元宗家高輪会理事。清元節保存会会員。

解説

三千歳

作詞 河竹黙阿弥

作曲 清元お葉 (一説には二世清元梅吉ともいう)

初演 明治十四年(一八八一)三月、東京新富座

解説 罪を犯した片岡直次郎は、追っ手に捕まる危険を冒して入谷村の寮で病氣療養中の遊女三千歳に逢いに行きます。待ち焦がれていた三千歳は直次郎にすがり付いて喜びますが、「思い焦がれて病氣になったが、どうせ治らないなら殺してほしい」と言い、直次郎も「悪事を犯し先祖の墓に入れない身だから回向院に墓を建ててほしい」と頼みます。二人が嘆くのを見た寮番の喜兵衛が追手が来る前に逃げるよう勧め、二人がそうしようとする所で曲は終わります。

明治の代表的名曲と言われ、その中でも三千歳のクドキ「一日逢わねば千日の」はこの曲一番の聴き所となっています。

詞章

へ冴えかえる 春の寒さに降る雨も へ暮れていつしか雪となり 上野の鐘の音も凍る 細き流れのいく曲がり 未は田川へ入谷村 「思いがけなく文賀に会い 頼んでやったさっ

きの手紙 もう三千歳の手へ届いた時分 門の締りが開けてあるか かどからそと 当たってみようか」 へたしかにここと目覚えの 門のとばそへ立ち寄れば 風に鳴子の 音高く へおどろく折から新造が ともしたずさえ立ち出でて 「モシ 直はんぞますか」「オ そうい声は千代春さんかえ」「早くこつちへ入んなましよ」「わちきは奥の花魁へ お知らせ申して参りんしよう」 へ晴れて逢われぬ恋仲は 人に心を奥の間より へ知らせ嬉しく 三千歳がア 飛び立つばかり立ち出でて 涙も涙にすがりつき へ後には二人差合いも へ涙ぬぐうて三千歳がア 恨めしそくに顔を見て 「わずか別れていてさえも」 へ一日逢わねば千日の 思いにわたしや患うて 針や葉のしるしさへ 泣きの涙に髪濡らし 枕に結ぶ 夢覚めて いとど思いのます鏡 へ見るたびごとに面やせて どうで永らえられねば 殺していつて下さんせと 男にすがり嘆くにぞ 「今更言つて帰らぬが 悪事をなしてお仕置きを受ければ先祖代々の 墓へ入れぬこの身の上 回向院の下屋敷へ 俺の墓をば建ててくれ これがお主へ俺の頼みだ」 へこれが頼みと手を取りて 共に涙にくれにける 男もぐちに絡まれて もてあましたる折からに へ始終を聞いて 寮番の 喜兵衛はひと間を立ち出でて 「こつち内にも寸善尺魔 障りの無きうち さあさあ早うお逃げなされませ」 へ 実に寒山の悲しみも かくやとばかり降る雪に 積もる 思いぞ残しける

ぼろ氣ならぬ殿振を へ見初て染て羽束師の 森の下露思は胸に
 女子の念が今日の今 届いて嬉しい此の逢瀬、疑暗して下さんせ
 やいのく／＼と取継り 赤らむ顔の袖屏風 へさこそと光國語寄
 てへさてこそく 相馬錦の此旗を、所持なすからは問ふに及
 ばず 将門が遺児 瀧夜叉姫であらうがナ へイ、ヤ知ぬ覚はな
 いぞ へヤア賞ないとは単怯の一言 肉芝仙より傳りし、蝦蟇の
 妖術習覚え、此古御所に隠棲む事 叡聞に達せし上は 最早遅
 れぬ御事が身上 本名名乗つて降参なせ へチエ、残念や口惜
 や、斯なる上は何をか包まん 實我こそ平親王将門が娘 瀧夜叉
 なるは へさてこそナ 一器量ある汝故 命を助け味方にと 思
 ふ心が仇となり 見頭されし上からは 習覚えし妖術にて、光國
 其方が命を絶つ 覚悟なせ へ何を小癩な へ怒れる面色忽に
 柳眉逆立ち吐息は 炎と化て焔々たる 妖術魔術の業通に 速の
 勇者もたちくく 梢木葉のさらくく 魔風と共に光國が
 襟髪挿んで宙宇の争 怪し恐し世に謳い 時を繪本の忠義傳
 歌舞伎に残す物語 拙き筆に書納む



喜

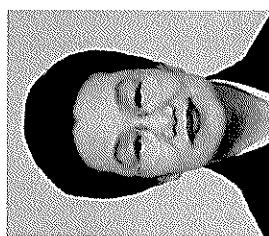
義太夫節

桂川連理柵

帯屋の段 (前)

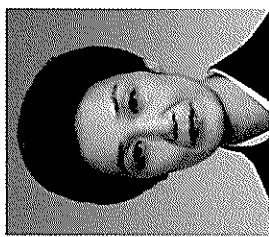
浄瑠璃 竹本駒之助

三味線 鶴澤津賀寿



竹本駒之助 (たけもとこまのすけ)

(一社) 義太夫協会理事。義太夫節保存会会長。平成十一年重要無形文化財保持者個人認定。十五年紫綬褒章受章、二十年旭日小綬章受章。二十七年文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。昭和二十四年年竹本春駒に入門。四十五年四世竹本越路大夫の門人。



鶴澤津賀寿 (つるさわ つがじゅ)

(一社) 義太夫協会理事。義太夫節保存会理事。平成二十一年重要無形文化財保持者総合認定。平成八年芸術選奨文部大臣賞新人賞、九年清栄会奨励賞受賞。十一年ヒクター財団賞奨励賞受賞。竹本駒之助に入門、四代目野澤錦系に師事。昭和六十一年初舞台。

菅宣助作。人形浄瑠璃として安永五年(一七七六)十月大坂北堀江座にて初演。上下の二巻からなり帯屋は下巻の後半になります。

今から二百数十年前、京都・桂川での心中事件を題材として、舞台となる商家・帯屋を中心とした筋立てに、刀のすり替す事件という武家の話題も織り込み物語は展開されます。

伊勢参りの帰路、石部の宿で偶然にも同宿となった帯屋の主長右衛門と隣家の娘お半。長右衛門は丁稚の長吉に言い寄られたお半を助けたことから、一夜を共にしてしまいます。帯屋の乗っ取りを企てる長右衛門の義母と義弟は、長右衛門に宛てたお半の手紙をもとに長右衛門を責め立てます。その手紙の存在を知り、夫の窮地を救うために一芝居打つ長右衛門の妻お絹。それぞれの登場人物の会話の妙を楽しめる場面です。最後は心中に至る哀しい物語の中での数少ない「笑い」をお楽しみください。

だ先の女房は、隣への義理があると、荒い詞も遣はなんだに、長右衛門成人以後、後妻に直つた身をもつて、連れ子の儀兵衛ばかりを大事に掛け、兄が事といふとがみがみ、がみがみ、ちと嗜みやれ。コレ嫁女、気に懸けてたもんな」

と、女房にかはる性、
「オ、その結構を見込んでの、身代をさ、ほうせにする長右衛門、随分と可愛がらしゃれ。ア、やかましやのやかましやの、やかましやの。コレお絹、隠居へ連れて往て昼寝などとしてたもれ」

と、負けてるぬ口逆らふは、後生の邪魔と繁齋は、裏の隠居へ嫁引連れ、往くと戻ると一時に、儀兵衛はとつかは内に入り。
「ア、コレ母者人、聞かしゃれ、一昨日兄貴が取りに往た為替の百両、まだ金を見ぬ故、合点が往かぬと飛脚屋へ往て問ふたれば、『一昨日長右衛門殿に渡した』と為替手形を出して見せた。すりや為替の百両は兄貴が宙でくすねたに極まった」

「オ、さうであるともく、戻りをつたら吟味して、親父殿への面当て、ぐつといがめてよい楽しみ。ヤコレ儀兵衛、ま一つよい事はなう、昨日上つた浜松の五十両も、金戸棚の合鍵して、ア、コ、コレ見や、ちよろり盗んで置いたは、金の要るわが身に遣りたさ。為替の金をくすねたからは、これも兄めに塗り付ける」

上り行く。
柳の馬場を押し小路、軒を並べし呉服店、現金商ひ掛硯、虎石町の西側に、主は帯屋長右衛門、井筒に帯の暖簾も、掛値如才も内儀のお絹、気の取り苦しい姑に、目を貫はじと襷掛け、洗濯物を引き伸しの、皺は寄つても頑丈作り。母のおとせは勝手を出で、

「朝飯の箸下に置くと駆け出した長右衛門。もう昼過ぎたに戻らぬは、ア、また川東で飲み据ゑてるのである。お絹、ちつと言はしれぬかいの」

「イエイエ、遠州の殿様から請取りの脇差、研屋から来るとそのまゝ、蔵屋敷へ持つて参られました」

「サイノ、脇差の研が出来ましたと持つて往くばかりにかう隙が入つて、内の見廻しが出来るものかいの。ア、同じ事でも弟の儀兵衛めは、毛痒い所へ手の往く様に精出しをるに、兄のぬるまに困つた」

と、継子を憎み実の子を、持て囃したる眞眞口。聞き兼ねて隠居繁齋、数珠爪ぐつて奥より出で、

「ア、お婆聞きづらい。死なれた隣の治兵衛殿が、五つになるまで育てられた長右衛門、無理に貫いて家の根継ぎ。死ん

「出来た」
「コレ儀兵衛、大きな声しやんな」
「オツ、ハ、ハ、ハ、ヤコレ母者人、この五十両はの、コレ、かう、かう」

と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘の、一腰々に差し詰まる、難儀を何と投げ首し、しをしを帰るわが家の内。見るより母は、やぐわん声、

「五町か十町ある屋敷に、半日の上か、つて、内の事は何になる。朝から芸子やおやま狂ひも、あんまり張でござらう」

と、喚くは隠居の耳へ筒抜け、
「又鬼婆がしやら声は、長右衛門が戻つたか」

と、お絹を連れて親繁齋、
「さつきにも言ひて聞かずに、長右衛門さへ見りや嗜み付く様に、近所の手前もちと思やれ。長右衛門もひだるかる。ソしお絹、早う飯をおましや」

「イ、ヤ、飯どころぢやないぞ、問はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門、一昨日取りに往た為替の百両、ドレ、金見やう、こ、へ出せ」

と言はれて吐胸の長右衛門、
「イヤ、折角参つたれど、先の亭主が折節留守。金は、明日請取る約束」

「ア、コレ兄貴、コレくくくく兄貴、ぬけくぬけくと嘘を言はしやないなう嘘を。おりやたつた今先へ往たれば、『金はこなたに渡した』と為替手形を出して見せた。それでもこなた請取らぬか」

「エ、それは」

「ア、金は明日の約束で、先へ手形はやるまいがの兄貴、先へ手形はやるまいがの兄貴」

「ア、コレ儀兵衛、儀兵衛、詮議にや及ばぬ。もう川東へ飛んだけちやある。昨日上つた五十両も心許ない。サア、こ、へ出して見せい」

「あつ」

と言ふより長右衛門、巾着の鍵こてこてと、金戸棚の引き出し開け、

「ヤア、五十両の金がない、どうした事」と驚く夫、お絹もびつくり繫斎も、共に驚く呆れ顔。

「オ、盗人ただけしい。錠の下りたこの戸棚、錠持った者が出さいで、誰が取ろぞいやい。ハア、これもお盗み遊ばしたのぢやな、オ、あつばれな家の根継ぎぢや、オ、根継ぎぢやく、イヤイヤイヤお根継ぎ様ぢやホ、ホ、ホ、親父殿、安堵である、嫁女、ヤぞ嬉しかるなう」

「イヤコレ母者、それはかりぢやないで、まだまだ、まだまだ

と、初めて聞いた親の恨み、胸に釘打つ長右衛門、面目涙に暮れるたる。お絹は舅の傍に寄り、

「モ一途にお聞きなされては、お腹の立つは尤もなれど、長右衛門様に不義はない。ありや相手が違ひました」

「ア、コ、コ、コお絹さんお絹さん、ヤリとてはサリトテハ、今読んだをどう聞かしたつた。まだその上にコレ『長様参る』へ、貧乏ゆるぎもならぬわいの」

「サイナ、その『長様』がきつい間違ひ」

「エ、間違ひ、間違ひ間違ひてどう間違えましたえ」

「サア、お半さんの色の相手は、内の子飼ひの、長吉ぢやわいな」

「エ、長吉、長吉々々アノ何かえ、丹波から来てゐるアノ凍垂れの長吉ですかえ、あの凍長、あの凍長、プツ、アハ、ハ、ハ、ハ、お絹さん、じやらじやらとハ、ハ、ハ、あいつはお前、明けの元朝から暮れの大晦日まで凍はつかり垂れてまつせハ、ハ、ハ、あんな物捕まえてお半さんの色の相手、プツ、ハ、ハ、ハ、あほらしもない。イヤイヤ、お前はんとこ、で競り合ふより、隣へ往て長吉呼んで来て、あいつに聞いたら知れることぢや、マ、待つとくんははれや、ハ、ハ、今呼んで来ますハ、ハ、ハ、あほらしいハ、ハ、アイタ、仕様もない事言ひなはるによつて道歩かりやせんがな。いかにわが夫の悪名が晴らしたいとて、長吉、ハ、ハ、ハ、マどうぞ長吉が

と滅相な事があるわいの。コレ、隣の娘のお半と兄貴が懇ろしてゐる、と近所から言ひ立つれど、エ、いとしなげに兄貴に限つて、淫らなと言はうか、大人気ない、そんな事、よもやあるまいくと思つてたがの、違ひない、コ、コ、コレこの状ぢやて、オツトどつこい久しい物ぢやがエヘン、サマ、それからご覧じ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、お父つあん、お母はん、読むぜく、高らかに読みませ。なんぢや長たらしう書きおつたな、エ、口のあたりはどつて退けてど、ア、『伊勢参りの下向道』、こいつぢやわいこいつぢやわい。『石部の宿の仮枕、今しも忘れかね参らせ候』、フンませたりませたり小へげたれめが」

「ヤアヤア、そりやまあ大それた不義淫奔。兄弟同然といひ、恩ある家の小娘を唆し、嫁入りの邪魔をおのれマア、ようしたなア。コレ親父殿、なんとがみがみ言ふが無理か、水晶輪の様な儀兵衛、畳頂口でござるかや」

と、悪は悪でも当座の理詰め、長右衛門は身に冷汗、親繫斎も胸迫り、

「長右衛門、エ、情けない事してくれたな。色は心の外とは言へど、あんまり図のない取り合ひで、おりや世間へ顔が出されぬ。嫁女の里へもとの面下げ、どう挨拶の仕様があらう。指差されぬ帯屋の家、暖簾に泥をよう塗つた」

家にゐてくれればよいが。へい、今日は結構なお天気でございます。隣の帯屋の儀兵衛でございます。長吉がをりましたら、ちよつとお貸しなされて下さりませ。直に、お返し致します。オ、るよるるよるハ、ハ、ハ、オ、イ長吉、ちよちよちよちよちよちよと来てくれ、ちよちよちよちよちよちよちよと来てくれ、ちよつとく」

と門口から、どやけば隣の内より長吉疾しや遅しと走り来る、儀兵衛は落着く、『エヘン』布袋なり。

「儀兵衛さん、なんの用とすえ」

「オ、長吉、ハ、ハ、ハ、よう来てくれた、よう来てくれたハ、ハ、ハ、マ、その凍から片付けその凍から片付けハ、ハ、ハ、ハ、この顔で、ホ、ホ、阿呆あほらしうて物言はりやせんがなハ、ハ、ハ、ハ」

「何ぢやいな儀兵衛はん、人が内に用事してゐるものを、今来いやれ来いと呼びに来て、人の顔見て笑つてばかり、フンお許しぢやな、おりやもう去んでこ」

「ア、コリヤ待て待て待て待てくれ待てくれエヘ、ハ、ハ、ハ、阿呆でもちよつこと理屈を言ひよるがなハ、ハ、ハ、ハ、イヤ済まなんだ、済まなんだ。ホンニわれの言ふとほりわれを呼び出してわれの顔見て笑つてばかり、すまん、サもう笑やせんぞ、俺も帯屋の儀兵衛ぢや、笑はんと言ふたら笑やせんぞ、それ、

次ページへ続く

笑ひはせまい、笑ひはせまいがな、ト、ト、どっこいしょ。
 さてマア長吉、今日、貴様を呼びに往たはなア、われとな、
 そちのお半さんと、ウ、ウ、オイ長吉、どうぞもう一遍だけ
 笑はしてくれワハ、ハ、ハ、ハ、アイタ、アイタ、横腹へこむら
 返り、ちやつと長吉、押さへてんか、く」
 「これでえ、か」
 「ウム、大きに憚り様、ア、びつくりしたびつくりした。アノナ、
 他のことでもないが、われとそちのお半さんと懇ろしてゐる
 といやい。サ、覚えがないとさつぱりと言ふてしまえ、ヨウ、ヨ」
 「ア、コレ長吉どん、こ、ちや合点か。サ、覚えのある事言ふ
 たがよい」
 とお綱が目交せ、呑込む長吉、
 「エ、何とすかいな、あの伊勢参りのこととすか、ハアアノ、
 それはあの何ぢやわいな、それはあの何ぢやわいな、それが
 あのそれがあの」
 「何ぢやい、それがあのそれがあのと、早う言はんかい」
 「そないに喧しい言ひないな、アノそれは何ぢやがな、皆様の
 寺前もちつくりちつと面目ないが、あの、伊勢参りの戻りに
 ナア、石部の宿屋でナア」
 「わりや見たか」
 「イヤアノ、それがあの、ちつくりちつと面目ないが、お半さ

んとナ、女夫事」
 「なんぢや分りやせんがな。モ一遍言ふてくれ、言ふてくれ」
 「ア、恥かしいな、あのな、お半さんとな、わたいとな、女夫事。
 アイ、懇ろしてゐますからは、お半さんはわたいが女房」
 「ヤイヤイヤ、そりや何を吐かしやがるのぢやい。コリヤこ
 の状に『長様参るお半より』」
 「儀兵衛様、しちくどいわいなく。コレ、その『長様参る』はな、
 内の子飼ひのこの長吉よ」
 「エイ、テモマ芸氣のない奴」
 と、儀兵衛は頭掻きむしる。
 「ア、儀兵衛、くたびれたの。台所で一杯せうかい」
 「オ、それがよこんしょ。コリヤ長吉、失せおれ。おのれに
 や大分せりぶがある」
 と、弱みを見せぬ親と子が、跡に引添ひ出来合ひの、壺を被
 つた色事仕、打連れ

第46回 邦楽演奏会 第二部 「喜・怒・哀・楽」

16時開演

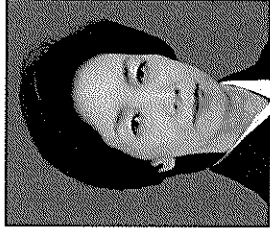
喜	清元節	青海波 <small>せいがいば</small>
怒	義太夫節	菅原伝授手習鑑 <small>すがわらでんじゆてならいかのみ</small> 車曳の段 <small>くるまびきのだん</small>
楽	新内節	道中藤栗毛 <small>どうちゆうひぎくりげ</small> 市子口寄せの段 <small>いちこくちよせのだん</small>
哀	常磐津節	お夏 <small>おなつ</small>
喜	三曲	八千代獅子 <small>やちよじし</small>
哀	一中節	小町少将道行 <small>こまちしょうしょうみちゆき</small>
喜	長唄	紀文大尽 <small>きぶんだいじん</small>

- 浄瑠璃 清元延初磨
- 清元延洲寿代
- 清元延明寿
- 清元紫蝶
- 三味線 清元紫葉
- 清元梅弓
- 清元延志寿霞



清元延初磨 (きよもとのぶはつ)

昭和四十七年清元初代入門。昭和五十四年六世宗家清元延寿太夫より「清元延初磨」の芸名を許される。同年邦楽オーディション(清元)合格。昭和五十四年より歌舞伎公演、新派公演、清元精調会、宗家演奏会、清元協会、都民フェスティバル、その他、演奏会、舞踊公演、NHKTV、ラジオ、放送などに出演。現在、清元宗家高輪会理事。「中節「宇治はる」としても活動。



清元紫葉 (きよもとしょう)

横浜生まれ、幼少より日本舞踊、三味線を習う。昭和四十九年清元流家元4世清元梅吉師より「清元益代」の名を許される(師・清元益寿郎)現代邦楽を枡屋正邦師に師事。昭和五十二年NHK邦楽技能者育成会二十二期卒業。昭和五十七年奏風楽楽員「長谷川春風」となる(創主・松原奏風(清元梅吉師))。昭和六十一年小唄田村派師範「田村わか枝」となる(師・田村彌枝)。平成十一年二世清元紫葉襲名。平成二十四年第一回中島隣祐創作賞受賞(受賞作品「山姥く夕月浮世語く」)。平成二十五年小唄田村派4代目家元「田村てる」襲名。現在、東京藝術大学音楽部非常勤講師・清元節保存会会員・清元協会理事・清元流理事・清元美成会主宰・(公益社団法人)日本小唄連盟参与。舞踊会、演奏会、放送、稽古、作曲(清元奏風楽約五十曲)等で活動。

解説

青海波

【作詞】永井素岳

【作曲】二世清元梅吉

【初演】明治三〇年(一八九七)六月

『柏の若葉』と共に五世清元延寿太夫襲名披露の為に作られた御祝儀曲です。松島から始まり、海の名所を東から西へ春夏秋冬を織り交ぜながら、情緒豊かに綴った内容です。

素演奏として発表された曲ですが、その後舞踊曲としても人気の高い曲となっております。

清元には珍しく、遊里のことが一切出てこない内容で、聞き所の舟唄(ヤンラ月の名所く)は追分をヒントに作曲されたと伝わっています。三味線も調子変わりが多く、出だしより一音高い調子で終わり、曲調もそれぞれ変化に富んでいます。

詞章

へ神代より光り輝く日の本や へ千珠満珠の世語りを、今に
 伝へて陸奥の千賀の塩竈煙りたつ、霞に明けし松島のへ
 眺めはつきぬ春の日の、潮の干潟をゆく袖に、うつす薫りも
 懐しき梅の花貝桜貝みるめの磯のあかぬなる花の跡踏
 む夏山の、筑波が覗く船の中、へ逢瀬の浦の私語 いつか浮
 名も立浪のうちこんでいる真心に 待つとは恋の謎々も、
 解けた素顔の夏の富士 其通路は星合の、中かけ渡す鶺鴒の
 へ天の橋立きれ戸とは裏表なる播磨瀧 へアラめで鯛は、
 神の代に 赤目と召され初めしより、蛭子の神の釣り上げし
 二世のかための懸鯛に、縁を繋ぐ諸白髪、若やく尉と、う
 ば玉の 闇の景色は漁火の、ちらりちらり月の出潮に 網
 引の声の、節も拍子も一樣に へヤンラ、月の名所は、余所
 ほかに、鳴いて明石の浜千鳥、ヤサハウくぬしに淡路は
 気にかゝる 室のとまりを、ソレ松帆の浦よ、ヤサハウエン
 ヤく面白や、へ波も静かに、青きが原を、なかにひかえ
 て住よしと 名も高砂の女夫松 雪にもめげぬ深緑、栄ゆく
 家の寿を なほ幾千代も延ぶるなる、直な心の清元と 目出
 度く祝ふ春早の、君が余沢ぞ有難き

浄瑠璃

竹本土佐恵

竹本綾之助

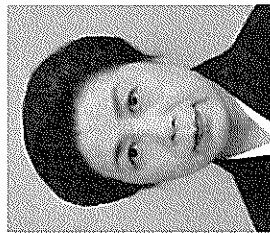
竹本土佐子

竹本佳之助

竹本朝輝

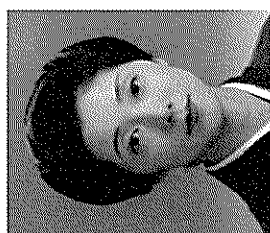
三味線

鶴澤寛也



竹本土佐恵 (たけもと さよえ)

(一社)義太夫協会理事。義太夫節保存会理事。平成十二年重要無形文化財保持者総合認定。昭和四十七年三味線方豊澤公佳として初舞台。野澤尊左衛門に師事。竹本土佐廣に師事の後、昭和五十八年竹本土佐恵となる。「竹本土佐恵の会」主催。



鶴澤寛也 (つるざわ かんや)

平成二十一年重要無形文化財保持者総合認定。十三年清栄会奨励賞受賞。十六年伝統文化ポータ賞奨励賞受賞。鶴澤寛八に入門。昭和六〇年初舞台。平成十九年より鶴澤清介に師事。「はなやぐらの会」主催。

解説

菅原伝授手習鑑 車曳の段

竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。延享三年(一七四六)八月、人形浄瑠璃として大坂竹本座にて初演。菅原道真を題材とした近松門左衛門「天神記」を下敷きに、当時話題となった三つ子の誕生などを取り入れた全五段の作品です。全編に親子の別れを描いた物語は、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、義太夫作品の時代物三大名作として親しまれています。

時の帝に重用される菅丞相(右大臣菅原道真)は、反逆を企てる左大臣藤原時平の讒言により失脚し流罪となります。菅丞相の領地を預かる白太夫の三つ子、松王丸は時平に、梅王丸・桜丸は菅丞相に使えており、兄弟間でも反目が続いています。ある日、吉田神社の社頭で時平の車を囲んで三兄弟の争いが起こり、三兄弟と時平の各々が「怒り」を顕わにするのでした。

詞書

鳥の子の巢に放れ、魚陸に上るとは、浪人の身のたとへぐさ。菅丞相の舎人梅王丸、主君流罪なされてより都の事ども取り賄ひ、御台の御行方尋ねんと、笠深々と深緑、土手の並木にさしか、れば。向ふからも深編笠、われに違はぬその出で立ち、互ひにそれぞれと近く寄り、

「梅王丸か」

「これはく桜丸。ヤレそちに逢ひたかつた。マア話す事」

「聞く事あり」

と、兄弟木陰に笠傾け、

「サテまづ問はう。その方はいつぞや加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと、内宝八重の物語。なんとお二方に尋ね逢ふたか」

「成程、道にて追付き奉り、菅丞相御流罪と聞くより対面なさしめ奉らんと、安井の岸まで御供せしに、御対面叶はず。輝国殿の計らひにて、御帰洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出で。斎世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉り、事納りしと言ひながら、納らぬは我が身の上。冥加に叶ひ御車を引く、そのありがたい事打ち忘れ、賤しい身にて恋の取り持ち。つひには御身の仇となり、宮御

次ページへ続く

謀叛と讒言の種拵へ、御恩受けたる菅丞相様、流罪にならせ給ひしも皆この桜丸がなす業、と思へば胸も張り裂くごとく、今日や切腹、明日や命を捨てうかと、思ひ詰めたは詰めたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べてみると当春より、喜び勇みおはするに、われ一人欠けるならば、不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝ふた上と、詮なき命今日までも、ながらへる面目なぞ。推量あれ、梅王」

と、拳を握り齒を喰ひ締め、先非を悔いたるその有様、梅王も『理り』と、暫し詞もなかりしが

「オ、道理々々。われとても主君流罪に逢ひ給ふ上は、都に留まる筈なけれど、御館没落以後、御台様の御行方知れず、まづこの方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうか、ととつおいつ心は逸れど、その方が言ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの月、これも心にかゝる故思はず延引。互ひに思ひは須弥大海。是非もなき世の有様」

と、兄弟顔を見合はせて、涙催す折からに、鉄棒引いて先払ひ、

「先退いて片寄れ」
と雑色がいかつ声、梅王立寄り、

「どなたぞ」

と尋ねれば、

の車、見違へもせぬ時平の大臣」

「斎世親王菅丞相讒言によつて御沈落。その無念骨髄に徹し、出逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、桜丸と」

「この梅王、牛に手馴れし牛追竹、位自慢で喰らひ肥えた時平殿のしりこぶら、二つ」

「三つ」

「五六百喰らはさねば」

「カ、々、堪忍ならぬ。言はれぬ主の肩持ち顔、出しばつて怪我ひろくな」

「ヤア法に過ぎた案外者、アレぶちのめせ、引括れ」

と、供の侍声々に、前後左右におつ取り巻く。兄弟は事ともせず、取つては投げ退け、掴んでは、打ち付けく投げ付くれば、辺りに近づく人もなし。

「待てらぶくくやい」

「ヤア、命知らずの暴れ者、いづれもお構ひあるな。御主人の目通り、御奉公はこの時節、兄弟と一つでない忠義の働き御目に掛けん。コリヤヤイ、松王が引きかけたこの車、止めらるゝなら、止めて見よやい」

と、鼻づら取つて引き出す車。

「ホ、桜丸」

「梅王丸、ここになくばいざ知らず、一寸なりと」

「本院の左大臣時平公、吉田への御参籠。出しばつて鉄棒喰らふな」

と、言ひ捨て、急ぎ行く。

「何と聞いたか桜丸、斎世の菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分言はぶぢやあるまいか」

「成程々々、良い所で出つくはした」

と、兄弟連の左右に列れ、尻ひとつからげ身構へし、今や来たと待ちゐたる。程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる。時平の大臣が路次の行粧、さながら君の御幸の如く、隨身青侍前後に列し、大路狭しと軋らせたり。兩人木陰を飛んで出で、

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

と立ち塞がる。

「ヤア何者なれば狼籍する。見れば松王が兄弟梅王丸桜丸。ム、ム、々、聞こえた。主に放れ扶持に放れ、気が違ふての狼籍か。但しはまたこの車、時平公と知つて止めたか、知らいで止めたか。返答次第、容赦はせぬ」と、白張の袖まくり上げ、掴み拉がんその勢ひ。梅王丸えせ笑ひ、

「ム、ハ、ハ、ハ、々、ヤア言ふな言ふな。気が違はねばこ

「遣つて見よやい」

車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾りも踏み折りく、踏み破り、頭はれ出でたる時平の大臣、

「ヤア牛扶持喰らふ青蠅めら。轆に止まつて邪魔ひろがば、轍にかけて敷き殺せ」

「ヤア言ふ大臣を敷き殺さん」

と、砕けし轍を銘々引提げ、大臣を打たんと振り上ぐる、

「ヤア、時平に向かひ推参なり」

と、くわつと睨みし眼の光、大千世界の千日月、一度に照すがごとくにて。さすがの梅王、桜丸、思はず跡へたちくく、五体すくんで働かず、

「無念、無念」

とばかりなり。

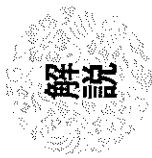
「なんと、我が君の御威勢見たか。この上に手向ひすると、御目通りで一討ち」

と刀の柄に手をかくれば、

「ヤア松王待て、待て」

「ハ、ア」

「金巾子の冠を着すれば天子同然。太政大臣となつて天下の政を執り行ふ時平が、眼前血をあへすは社参の穢れ。助けにくい奴なれども、下郎に似合はぬ松王が働き、忠義に免じ



道中膝栗毛

市子口寄せの段

この曲は、富士松魯中ので、弥次喜多の両人が吉原宿で川留に遭い、宿屋に泊ると、警女や市子がやはり川留で泊り合

安政元年七月江戸中村座の夏狂言の二番目に三代目桜田治助が脚色した「旅雀我妓話」の外題で、中村市蔵が弥次郎兵衛、中村鶴蔵が喜多八で上演した膝栗毛が非常な評判で、今日義太夫や新内で語っている膝栗毛のチャリ場はこの時出来たもの

弥「待ったと
へ引き合うはずみに間の唐紙押し倒し 隣座敷へ真うつ向け
将棋倒しにころげこむ
へ内にはびっくり三四人 女の声の仰山に桑原桑原世直しと
上を下へとわめきけり
へ宿の亭主も驚き駆け上がり この場の様子合点ゆがず
亭主「ああお前さま方はなんとなされました と
へ問われて警女が金切り声
警女「わしら三人ながら目が見えまねえからどうしたことが
分からねえが 雷さんと地震どんが一度に落ちたと思いやん
したよう
警「ああ痛い痛い 目こそ見えねえが鼻筋は横つちよの方に
ぶつ通った ええ鼻だ ええ鼻だとほめられた大事な鼻をす
りむいた ああ痛い痛い
警「これおつえサアわしははあまた問屋場の馬が放れて ここ
の二階さへ鼠でも取りに来たかと思いやんしたよう ああ痛
い痛い 額にこぶが出来た アア痛
へああ痛いと目無し鳥 口を揃えてさえずれば
へそばに聞き入る女連れ いわずとそれと市子がさし出で
市子「アア私どもは警女さん達と道連れになり泊り合わせた巫
女でござりまするが あの二人の衆が唐紙を押し倒し背骨の



へ富士の白雪朝日でとける 娘島田は寝てとける とけたら
どうするえ
喜「ところで弥次さん だんだんと旅人は多くなる 宿の手当
は悪し この川留には俺あもうあきあきしたぜ
弥「ああ遅えね遅えねえ とこたえつ 隣座敷の三味線に
へ耳そば立て弥次郎兵衛 そろりとのぞく襖の穴
へ小声になって
弥「ヨウヨウ喜多八 まあ滅相な代物だぜ
喜「なんだ弥次さん 女か
弥「女どころか粒揃いで ふるい付くよつだ
喜「へん うまく云うぜ
弥「うめえどころか 年増でも新造でもお望み次第だ
喜「エ弥次さん そんなら俺にも少し見せねえ
弥「まあ待て待て この穴はな今日一日俺が借り切りだ
喜「そんな意地の悪い事を云わず拜むから少し見せねえ
弥「まあ待て待て
喜「少し見せて
弥「まあ待て
喜「少し

折れるほど打ちました 女とあなどり馬鹿にして
へそれではすまぬすまぬとたけり立て
警女はなむさら腹を立て きかぬきかぬと木綿だすき
へ巫女は畳を箒ばたき
へ叩き立てられ両人は 向こうへ傷を付けながら痛みいつて
ぞいたりしが
へ弥次は亭主にうち向かい
弥「いやも承りまして驚き入りましたる儀にごぞりまする 一
体此者儀 生国よりよく存じ確かなる者に御座候故 我等同
道にてまかり出で 貴殿方に一宿仕り候処実証也 然る処此
の者懐惚けて小便に起き戸惑いを致し 皆様に尾籠なる事推参
仕り候段 何とも申し訳御座無く これに依つて謝り証文奉
公人の請け状こたまぜに依つて件の如しと
へ云うより市子は
市「コレこの昼日中とまどいをする馬鹿者がどこの国にあるも
のか
弥「いやもお疑いはこもつともなれど この男には少々取りつ
きものがござりまする いったいこの者の親が殺生好き 親
の因果が子に報い 梟と木菟が一度に取り付き 昼日中でも
少しも目が見えませぬ それにときどき木菟の鳴き声をいた
します と

次ページへ続く

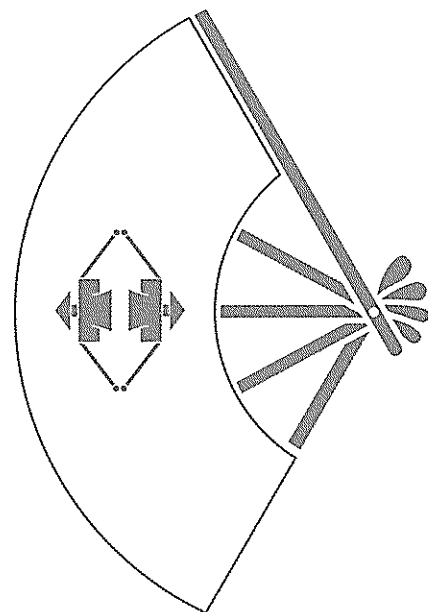
へ云つより喜多八まじめ顔
喜「ゴロスケホーホー　ゴロスケホーホー
弥「ハイあの通りで
喜「ゴロスケホーホー
弥「もういいんだよ
喜「ゴロスケホーホー
弥「だまらぬかい　えーこの通りで誠に困り切ります　と
へ聞くより亭主おつ取つて
亭「はあ粗相とあらば是非がない　皆様が不承知で　しかしながら少しでも傷があれば膏藥代のその代り　江戸のお客さんは南縁一片はずんで川留めの慰みに　警女さんには何を唄わせ　また市子さんにはお前方のおかみさんが色女の生口でも寄せてもらい　それで双方仲直りと
へきいて皆々気もほどけ　まるくおさまる車座に　はや持ち来たる酒肴　さいつ押さえつ盃に　飲めや唄えや　一寸先はやみくも警女が高調子
へ巫女は鈴振る爛徳利　またかわり目の押さえはうるさい一拳しよ　しめしめよいやさのお廻り
へ酔つたよ酔つた酔つた五勺の酒に　よいよい機嫌と忘るる酒の徳ぞかし
喜「えあさあこれから市子さんの口寄せの番だ　弥次さん先へ

喜「弥次さんお前が泣くのか　こりやおかしい　鬼の目に涙だ　は、
市「わすれもしない　たった一人の子宝は脾胃虚してやせこける　米は無し　日なしはせがむ　大家さんからは店賃の催促
弥「ああもうそんなに云つてくれるな　胸が張り裂けるようだ　勸弁してくれ浮かんでくれ南無阿弥陀仏く
市「それにわたしが奉公してせつかくためた着物はみんな置きなくしてしまい　質はさかさには流れ申さぬ
弥「そのかわり寺前は結構なところへ行っているからいいじゃねえか　エエ俺と喜多八を見ねえな　娑婆にいて今に苦勞のしほうでいだ　浮かんでくれ勸弁してくれ南無阿弥陀仏く
市「なあに結構どころか　小さい石塔は建ててくれても寺参りはせず付け届けもないから無縁同然　今では石塔も垣根の下になり時々犬が小便をひっかける　ほんに長死にをすと色々な目に逢い申す
弥「ああもつともた堪忍してくれく　南無阿弥陀仏く
市「そのつらい中でそなたのことは片時も忘れぬ　どうぞ早く冥土へ来て下され　やがてわたしが迎えに来ます
弥「と、と、とんだこつた　エエそんな遠い所から迎えに来るには及ばねえよ　南無阿弥陀仏く
市「云いたいことはたくさんあれど　あの世の使いが繁ければ

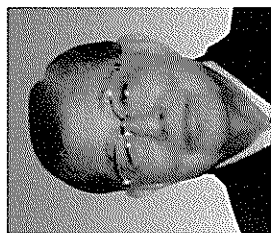
とへ汲み来たる
市「そもそも謹み敬つて申し奉る
市「やんれなつかしや　よく水を寺向けて下さつた
弥「オイオイちよいと年増だがお前は一体誰でい
市「はあわしは水を寺向け殿のためには唐の鏡だ
喜「ナア弥次さん　唐の鏡つてのはお前のおふくろのこつたよ
弥「なにおふくろだ　おふくろなんかに用があるかつてんだ　エエ出直せく
市「なあに唐の鏡に用がなくばわたしはそなたの枕添い
弥「オイオイ唐の鏡だ枕添いなどと　いちいち符牒じゃわからねえや
喜「弥次さん枕添いつてのはお前の死んだ嬢のこつたよ
弥「なんだ嬢か嬢か嬢か　嬢と聞いちゃあなつかしいや　市子さんたつぷりやつてくんねえ南無阿弥陀仏く
市「やれ厚がましくもよく水を寺向けて下さつた　わたしはこなたのような意気地なしに連れ添うて一生食うや食わずに寒くなつても袷一枚着た事は無し　単物ひとつ　ああら裏ほしやく
弥「ちげえねえ堪忍してくれく　俺もあの時分はなあ　ずいぶん工面が悪く苦勞死にさしたのが心残りだ　勸弁してくれく　浮かんでくれ南無阿弥陀仏く

弥陀の浄土へ歸り申す　と

へ口寄せが冥土の道から暗闇の恥をわざわざ明るみへ
へ並べ立てられ弥次郎兵衛　佛になった山の神　死んで来いとはさりとは　あんまり酷い情けない　俺やいつまでも死にやせぬとこぼす泪は大粒に　玉屋がしゃぼんの如くなり

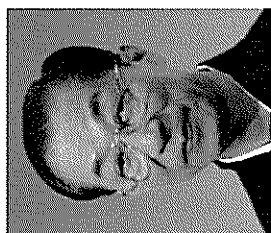


- 浄瑠璃 常磐津 津太夫
- 常磐津 松重太夫
- 常磐津 松希太夫
- 三味線 常磐津 東蔵
- 常磐津 菊与志郎
- 岸澤 満佐志



常磐津 津太夫 (ときわすつたけう)

昭和十一年茨城生まれ。常磐津文左衛門の内弟子となり、声が良く出たのと、大夫不足や先輩に勧められたこともあり春衛大夫に後に津太夫となる。邦楽番組や歌舞伎・舞踊会など数多く出演。重要無形文化財常磐津節(総会認定)保持者。常磐津節保存会理事。常磐津協会常任理事。旭日双光章受章。



常磐津 東蔵 (ときわすとうぞう)

昭和九年東京生。母の手ほどきを受け、同二十二年十六代目常磐津文字大夫入門。翌年初舞台。同三十六年NHK邦楽技能者育成会六期卒業。同三十九年NHK東京邦楽合奏団入団。同三十九年TBSテレビドラマ「運舞」テーマ音楽作曲、以後作曲活動開始。同五十二年「常磐津東蔵発表会」開催、以後継続中。同五十三年文化庁「舞台芸術創作奨励特別賞」。同五十五年文部省「芸術祭優秀賞」。平成十五年「日本文化紹介事業団」結成、以後国内・国外において公演を継続中。

解説

お夏なつ

井原西鶴の「好色五人女」に材を取り、坪内逍遙が明治四十一年「早稲田文学」に掲載。大正三年九月帝劇初演(六代目尾上梅幸)。作曲は二代目常磐津文字兵衛。

但馬屋の手代清十郎と、主人の娘お夏との恋も、清十郎の死に振り一転、お夏は狂乱します。晩秋、姫路の田舎道を行くお夏に、心ない里の子や、酒によった馬子がからみ、哀れさを増します。いつか暮れゆく秋の野に、悄然と佇むお夏の姿が涙をさそいます。

詞章

へ行く秋の、名残をとどめおきて田の、刈跡くろむ一トじぐれ、晴れて西日の赤くと、雲を彩る夕やけに、しよんぼり立つや破れ葉山子、一つ残りてからころり、鳴子の音に思ひ出の、

へ向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た菅笠が、よう似た笠が笠がよう似た菅笠が、

お夏へ笠よ笠、梅の花笠その花笠を、縫ひやわすらふ藪鶯の、

ほげきよくと、身をさかさまに、泣いて殿御に逢はる、ならば、なんな七夜もクワ一 泣きあかそもの、我れは此の世に後れてひとり、染むる間もなき晩紅葉

へ風に散りそろ 紅葉が風に、ひらりひらく 散るもみぢ葉を、染めて小袖の晴れ模様

お夏へなんぢや嫁入りぢや、すりや見事な介添が附いて、釣台が七つり、箆筒長持が丸棹、シテ其花嫁御の名は

へたわいも波の浮き寝鳥、夫に離れて昼夜を 狂い渡るぞ便なけれ、

へお夏の唄じゃ クワ一

へ清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて 生きて思ひをさしよよりも

るへアレく清十郎が来たぞやく お夏へエ、ドレどこへ

丙へソレソレそこへ

へ菅笠がへほんにすげない浮世とは、知れどもしやに牽かれてけふも へはやたそがる、初木枯に、木々の木の葉のはんらはら泣きつ へ怒りつ

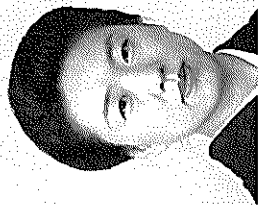
へしどけなく へみだれ狂ふぞ

へはしなく流れあふみ路や、一樹の下の行きあひも、他生の縁や菩提の縁、げに大慈悲の御仏の、堅き誓いぞ頼もしき

固き誓いぞ頼もしき

喜 三 曲 八 千 代 獅 子

- 三 絃 川瀬露秋
- 大坪正秋
- 小高麗秋
- 長塚梨秋
- 箏高音 清水芳秋
- 水飼希秋
- 箏低音 山崎扇秋
- 近澤恵秋
- 胡弓 高橋翠秋



川瀬露秋 (かわせろしゅう)

福岡県久留米市出身。一九七四年、九州系地歌箏曲の三原幽香師に師事。一九八二年生田流箏曲白秋会家元川瀬白秋師の内弟子となり、箏・三絃・胡弓・歌舞伎音楽を学ぶ。また九州系地歌の井上蓮子師に唄・三絃を学ぶ。一九八七年、小林露秋の名を許される。二〇〇九年、川瀬露秋の養女となり川瀬露秋と名乗る。二〇一五年、(公財)日本文化芸術財団「創造する伝統賞」受賞。現在九州系地歌を藤井泰和氏に師事。日本三曲協会理事。生田流協会理事。生田流箏曲白秋会代表。

解説

八 千 代 獅 子

原曲は尺八曲で、政島検校が胡弓曲に移し、初世藤永検校が三絃曲に移して世に広まったのが《八千代獅子》であると伝えられています。政島検校と初世藤永検校は十八世紀半ばの大坂で活躍した盲人で、初世藤永検校は政島検校に三絃を教えた師匠です。作詞者は、一説に、園原勾当と言われています。

八千代獅子は、結婚式や襲名披露などの折に演奏される祝儀曲の代表です。喜怒哀楽で言えば、「喜」に満ちあふれた場を彩る曲として親しまれてきました。

歌詞は、常緑の松と竹、豊作の予兆とされる松に降る雪を詠み込んで、変わらぬ御代の繁栄を祝っています。

長い間奏の「手事」は三段構成で、十七世紀半ばに流行した《獅子踊り》という曲の旋律を取り入れています。

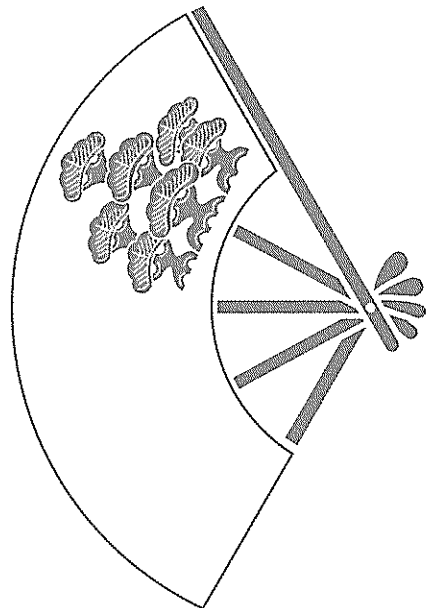
本日は、白秋会のメンバーにより、三絃、箏高音、箏低音、胡弓という編成で合奏します。箏低音は平調子で、三絃とほぼ同じ旋律を演奏します。箏高音は本雲井調子で、川瀬白秋の手付によるもの、胡弓も川瀬白秋の手付けです。

詞章

へいつまでも、変はらぬ御代に合ひ竹の、世々は幾千代八千代経る。

〔手事〕

へ雪ぞかかれる松の二葉に、雪ぞかかれる松の二葉に。



- 浄瑠璃 都一桜
- 都一みき
- 都一光
- 三味線 都一中
- 都一志朗
- 都一千



都一桜 (みやこいちおう)

一中節浄瑠璃方。十二世都一中に師事。平成十年都一桜の名を許される。長唄稀音家六四氏に師事。稀音家六茂美邦楽囃子を菊川楓雪の名も持つ。国内外での演奏会、舞踊会に於いて浄瑠璃方を務め、静岡市内にて邦楽教室を主宰して邦楽の普及活動を務めている。



都一中 (みやこいちゅう)

一中節三味線方。重要無形文化財一中節保持者(総合指定)に認定。昭和二十七年東京生まれ。十一世都一中に師事。平成三年十二世都一中を襲名、一中節宗家継承。文化庁芸術文化立国懇話会委員、都一中音楽文化研究所代表、一般社団法人古曲会評議員、日本藝術院賞、第一回文化庁芸術作品賞受賞。

解説

小町少将道行

この曲は初世都一中の作と伝えられています。「旧刻都羽二重拍子扇」には「鉢たたき小町少将」「大和歌五こく色紙」の題名になっています。これは清水三郎兵衛作の古浄瑠璃は操だけでなく当時の歌舞伎にも上演されて好評でしたので、初世一中が語ったものようです。なお、紀海音作の「小野小町都年玉」というものがありますが、この筋は小野小町と深草少将とは相慕う間でしたが、大伴黒主もまた小町に恋慕して二人の仲を割こうとします。小町は雨乞いの和歌の賞として東宮の妃になるようとの恩命を受けましたが、小町はこれを聞いて深草少将を相携えて出奔します。そして道行になるのですが、その後黒主のために苦しめられますが、遂に黒主は刑せらせて二人は元のように世に出ることになると云うものです。この物語の中の道行もこの曲にかなりの影響を与えているものではないかと思われます。

詞章

江戸節 シテへ恋せずば、玉の盃底となく、ツレへ物の哀れはよも知らじ、^{いぢ}勞しや少将は、色地小町御前を負い参らせ、何方と指して白玉か、何ぞと人の問わんには、露と答えて消えなまし。哀れ二人が仲々に、^{いづ}何時下紐を打ち解けて、木賊色なる狩衣に、紫匂う藤袴。萎るる裾を搔取りて、甲斐甲斐しげに見ゆれども、^{うば}茨扱殻殺竹や、道の小石に足痛み、裾の紫引替えて、^ひ緋の袴かと疑はれ。讀シテへいとど臆夜に降る糞雨が、ワキへ落つるは涙かと、ツレへ袖打ち払い、冷泉辿り辿りと迷われる、^{こい}恋路の習いぞ哀れなる。色詞、ワキへ姫君涙と諸共に、^け実に数ならぬ我故に、斯く迄御身を苦しむる。勿体無やと宣えば、シテへ少将顔を振、上げて、君故ならば此命、何か惜しまん鴛鴦の、ツレへ羽交い並べん逢瀬には、此年月の胸の闇、一字捨今宵晴れ行く天の川、渡り比べて七夕の、年に一夜の思いを知らば、今の二人の行末を、守る誓の神垣や、あれは御燈の光ぞと、訪ね巡ればさもあらぬ。狐火の後になりつつ先に消え、^{おいて}ちらりちらりちらめくは、我を追手の来たるかと、隠れ頼らん案山子にも、長唄身を陳きて隠れ笠。隠れ家とても風吹く、心も足も冷え渡り、神気も疲れ果てければ、深々と物凄く、^{なま}亡き魂送る仇し野の、松の木陰に立ち寄りて、暫く疲れを霽らさるる。

唄

杵屋 彌十郎
東音 渡邊雅宏
東音 西垣和彦
和歌 山富朗
杵屋 彌十彦
杵屋 六三郎
岡安 祐三朗
杵屋 六治郎
稀音家 一郎

三味線

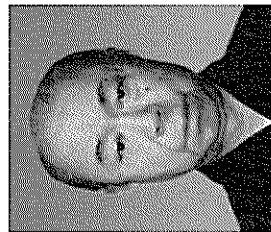
囃子 笛

小 鼓

大 鼓

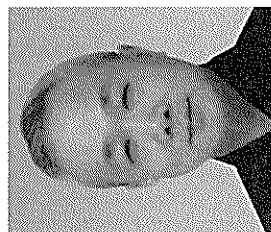
大 鼓

松永 直矢
藤舎 推峰
藤舎 呂鳳
藤舎 華鳳
藤舎 呂秀
藤舎 円秀



杵屋 彌十郎 (きねや やじゅうろう)

東京生まれ。父は初世杵屋彌之介、母は稀音家六柳。初世吉住小真治、稀音家三郎助、東音西垣豊蔵に師事。一九九八年十代目杵屋彌十郎を襲名。杵屋彌十郎派家元。一般社団法人長唄協会監事



杵屋 六三郎 (きねや ろくざうろう)

東京生まれ。母希音子の手ほどき後、十三世杵屋六左衛門門弟六郎次に師事、一九六九年、十四世杵屋六左衛門より六哲郎名を許され、三世六三郎を経て、二〇〇二年長唄池之端派家元十三代目杵屋六三郎を襲名。



藤舎 華鳳 (とうしゃ かほう)

一九四二年藤舎呂華東の長男として生まれる。四世藤舎呂船、田中伝一郎、寶山左衛門、杵屋五三吉各師に師事。一九七〇年東京藝術大学卒業。藤舎華鳳を襲名。一九七二年日本音楽集団による第一次ヨーロッパ公演に参加、以後十数回の海外公演に参加。

解説

紀文大尽

「紀文大尽」は明治四十四（一九一）年五月、長唄研精会で発表された演奏会用の長唄で、作詞は中内蝶二、作曲は四世吉住小三郎（後の吉住慈恭）と三世杵屋六四郎（後の稀音家浄観）によります。従来の物語形式の長唄の型から外れた斬新な曲で、今日に至るまで研精会の代表的作品となっています。曲の内容は『蜜柑船』で有名な紀伊国屋文左衛門（紀文）の事跡にまつわるものですが、文左衛門が実在の人物であった確証はいまだなく、またその生涯も様々に伝えられています。

曲は六つの段に分かれており、第一段から第五段までは初代紀文が暴風雨の中を江戸へ蜜柑を選び、巨万の富を築くまでを二代目紀文が見た夢として描き、第六段からは一転して二代目紀文が吉原で豪遊するさまや、遊女几帳との問答、大尽舞を舞う様子を描写しています。

全曲を通して変化に富みながら非常によくまとめられた曲であり、また、これまでにない標題音楽的な発想も感じられます。特に曲の冒頭、第一段にあたる「嵐の合方」は一下りという独特な調弦で、荒れ狂う海の不穏な情景を三本の糸の不安定な音程で表し、様々な技巧で打ち付ける波の音や帆柱の折れる音など、嵐に翻弄される船を緻密に表現しています。

詞章

鳥も通はぬ八丈が島へ 通ふわが身は厭はねど
跡に残りし嬬や子は どうして月日を送るやら

ヤンラ 幾夜あかしの浦漕ぐ船も 浮かれこがれて ソレ
磯へ寄る サアサアエツサエツサヨヤサノサツサ

時に正保元年 霜月はじめつかた 続く風に海荒れて 船は
ものかは空翔ける 鳥さえ通はぬ浪の上 柱も折れよ 帆も
裂けよ 経帷子に縄だすき 命知らずの船夫ども 櫓声合せて
エツシッシ たださえ難所と聞こえたる 遠州灘を乗切つて
品川沖に現われしは名にし紀の国 蜜柑船 幽霊丸とぞ
知られける

積んだ蜜柑は八万五千籠 陸に運んで車に載せて 載せた車
は八百五十輛 曳けや曳け曳け 神田の市へ ふいご祭の折
からに 蜜柑の私底時を得て 一挙に握る五万両 黄金の花咲
く 実も結ぶ 初代紀文が運開き 幸先よしや

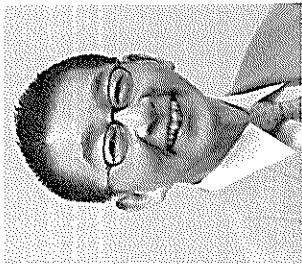
吉原の里は闇なき喜見城 いつ更けたやら明けたやら さい
つ おさえつ杯の 数重なりし酒づかれ 無明の酔にとろと
ろと 雪のあしたの置こたつ うたた寝の 夢の最中にまご
まごと 在りし昔の面影を見るも 親子の縁かな
「文さま どうぞしたのかえ」

背にやわ手の音かるく 優しき声に覺まされて
「そもしは几帳か」
なつかしき その面影を見るにつけ 今のわが身のはずかしや
「実に世の中は不思議なものじゃ 父は巨万の富を作り 我
は巨万の富を消す」
人は一代 名は末代 作るも消すも世の中に 天晴おとこと
唄われて
「紀文の名さえ残るなら 本望じゃ満足じやと 父の臨終の
教言」
所詮 浮世は夢じやもの 恋も無常もあるものか いや 恋
ゆえにこの苦勞 傾城に まことなしとはてんごうな そ
りや訳知りのいわぬこと まことも嘘も本ひとつ 真ぞ命と
此方から 尽すまことはくみもせて 逢瀬はかなき七夕の
雨に浪たつ天の川
通ひ路絶えておのずから 他所へ根曳の身となりもせば か
けし誓いも嘘となる
また初めから偽の勤ばかりに逢う人も 絶えず重なるその時
は 初めの嘘も皆まこと
「縁のあるのが誠でござんす」
「それは吾等も不即不離 昨日も一蝶が歌うた小唄に ハテ
何とやら」
やぶれ菅笠 ヤンヤ 締緒が切れていの オウエ 更に着も
せず エサンサ ヤアサンサ 棄てもせず
「おう そこへ見えたるは二朱判吉兵衛 向ひの茶屋で奈良茂

めが 雪見の酒盛 今たけなわじやと聞いたは真か」
「なかなか」
「大尽冥利その雪消して 奈良茂めに鼻をあかすも一興な
心得たか」
「心得ました」
幣間の二朱判 旨を受け 黄金色なす三百両 小判に小粒か
きまぜて 黄色な雪がそりや降るわと
表にばらばら撒き出せば 甘きに集ふ蟻の群れ 人波どつと
押寄せて こけつまるびつ奪い合う
塵もとどめぬ白妙の 雪の眺めもたちまちに 踏みかえされ
て泥の海
沖のナア 暗いのに 白帆が 白帆が 白帆が見ゆる あれ
はナア あれは紀の国 紀の国蜜柑船じやえ
「大尽舞を見さいな」
前代未聞の紀文が豪興
廓一番ならびなき その全盛の一節を ここに伝えて 後の
世がたり

本日のナビゲーター

葛西聖司 (かさいせいじ)



アナウンサー・古典芸能解説者。
一九五一年東京都生まれ、中央大学法
学部卒業。NHKエグゼクティブアナ
ウンサーとしてテレビ、ラジオのさま
ざまな番組を担当してきた。現在はそ
の経験を生かし、歌舞伎など古典芸能
の解説や講演、また日本伝統文化の講

義などで大学の教壇にも立ち、朗読教室や執筆活動も続けている。

主な著書

- 『名セリアのカ』(展望社)
- 『ことばの切っ先』(展望社)
- 『文楽のツボ』(日本放送出版協会)
- 『能楽入門2 能の匠たち』(共著、小学館)
- 『能狂言なんでも質問箱』(共著、松書店)
- 『歌謡曲のカーアナウンサーふたりロザミア語る』(共著、展望社)

本プログラムの詞章は実際は実際に演奏される部分のみ掲載となっております。
全曲分の歌詞をお知りになりたい方は、それぞれの協会までお問い合わせ下さい。

邦楽連合会 (事務局 日本三曲協会内)

- 一般社団法人 義太夫協会 事務局 電話 03-3541-5471 <http://www.gidayu.or.jp>
- 清元協会 事務局連絡所 電話 03-3739-6765 <http://www.kiyomoto.org/>
- 一般財団法人 古曲会 電話 03-3431-3336
- 新内協会 電話 03-3260-1804
- 常磐津協会 事務局 電話 03-3636-2220 <http://www.tokiwazu.jp/>
- 一般社団法人 長唄協会 事務局 電話 03-3542-6564 <http://www.nagauta.or.jp/>
- 公益社団法人 日本三曲協会 事務局 電話 03-3585-9916 <http://www.sankyoku.jp/>

次回の邦楽演奏会は平成29年2月25日(土)を予定いたしております。